

Folkwang Museumにおける展示形式の変遷 —— 非西欧へのまなざしと併置的展示の実現

安永 麻里絵 (東京大学)

本発表は、ドイツ北西部ハーゲンの Folkwang Museum (現 Osthaus Museum) における 1900 年代から 1921 年までの展示を取上げ、文字資料および写真資料からその形式的変遷を辿り、その美学的背景を考察することを目的とする。

1896 年にカール・エルンスト・オストハウス (1874-1921) によって設立され、1902 年に開館したこの美術館は、今日その一部が近隣のエッセン市の Folkwang Museum に所蔵される充実したモダン・アートのコレクションを形成したことで最もよく知られている。だが、工業化の進展に伴う文化的荒廃に対する危機感から誕生し、「芸術を生活に引き戻す」ことをその使命に掲げたこの美術館は、当初から非西欧の事物に多大なる関心を寄せていた。この関心は、その初期においては特に、ナチズムの源泉となったとして批判を免れ得なかった世紀転換期における汎ドイツ思想との関連が否定できないがゆえに、これまで詳細な議論が回避されてきた傾向がある。しかし、まさにこのモダン・アートへの関心と非西欧への関心との共存から、この美術館における展示形式はきわめて特異な変遷を辿った。事実 Osthaus は、19 世紀後半の美術工芸博物館における社会教育機能をめぐる議論を受け、当初から公衆への媒体としての展示形式の重要性を自覚していた。そして注目すべきは、この美術館が 1913 年という早い段階で、モダン・アートと非西欧の事物を併置する展示を構成した点にある。

本発表ではまず、フランス・ベルギーにおける装飾芸術運動の影響を強く受けた 1900 年代の展示を分析する。建築家アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデの影響下でポスト印象主義のコレクションの充実が図られるとともにジャポニスムへの傾倒が際立つこの時期の展示では、あらゆる展示物のとりわけ色彩的調和に主眼が置かれる一方で、もっぱら地理的・歴史的区分に従う展示構成からの逸脱がすでに部分的にはあるが認められる。次いでいわゆるプリミティヴィズムがドイツ表現主義の芸術家たち、より直接的にはオストハウスと親交の深かったエミール・ノルデに共有されるなか、1912 年を転機としてオストハウスはアフリカ・オセアニアの事物を美術作品として蒐集しはじめ、これらをモダン・アートと併置する展示を試みた。その背景には、非西欧世界の西欧からの地理的距離感を歴史的時間軸に変換する特殊な歴史概念とともに、オストハウスによる「心理的親縁性」および「展示空間の中立性」というふたつの新たな概念の導入があった。この展示形式は当時のドイツ国内の美術館関係者にインパクトを与え、その影響は遠くニューヨーク近代美術館の初代館長アルフレッド・バー・Jr. にまで及んでいる。

ホワイト・キューヴ成立前史において重要な一画を占める Folkwang Museum の展示を、美術館が眼差した非西欧の側から逆照射して検証したい。